

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

夏安居

― 梅熟の時節 ―

住職 村上 徳 存

コロナ禍中、三度目の非常事態宣言が発出せられた。

未だ、コロナウイルスによる感染症は収束をみない。変異株のまん延による対応に苦慮し、感染症は拡大する模様で、むしろ、一層の三密を避け、消毒、手洗い、自宅待機、不要不急の外出を控えることを要請せられている。

四月に入り、僧堂にも、新到和尚が入堂し、五月十四・十五日に夏安居に入った。

六月に入ると、梅雨の季

節でもある。仏制に従って、僧堂に安居し楞嚴会を啓建し、雨安居を無事過せるように精進する季節でもある。

古参の役寮さん、副監事さん、二・三年安居の古参大衆と、初めて大衆に混って僧堂生活をする新到和尚も、僧堂裡で、朝の洗面、暁天坐禅、楞嚴会行道、朝課等、慣れないことである。この安居の三ヶ月間で、読経、行持を習熟し、お盆の頃には僧堂生活も、雲水らしくなる。龍蛇混雑で、不可思議の力が働いてく

る、梅熟の時節でもある。

中国の唐の時代、禅宗が盛んになった時代に、中国江西省を中心に禅風を振った時代に、馬祖道一禅師が居られた。その元へ、法常という僧が修行に來られた。法常は馬祖禅師に、「如何なるか仏」と尋ねた。

これに対して馬祖は、

「即心是仏」(この心が、そのまま仏であるという意)と、端的に答えられた。

これを聞いて、法常は悟りを開いて、大梅山に登り、質素な生活をし、三十年間、山も下りず、坐禅三昧を続けられた。

ある時、その山中へ、雲水が入ってきて、道を尋ねると、「山が青くなったり黄色くな

ることを見るだけである。」
「山を下りるにはどうしたら良いか。」を尋ねると、「随流去」(流れに随って下れ)と、答える。

風変りな和尚が居るものだと不審に思い、馬祖の処に

帰り、心あたりを尋ねると、その昔、法常という和尚が居たが、その和尚に違いな

いと思われたのか、馬祖は、

もう一度訪ねさせ、馬祖は、
現在「即心是仏」ではなく
「非心非仏」と説いている。
と言わせると、法常は、

「你非心非仏、我は只管即

仏」と答えた。

それを伝え聞いた馬祖門下では、塩官齊安は嘆いて、

「梅子熟」と、梅の実が成熟すると同様に馬祖が法常を印可した語、馬祖の「即心是仏」を承当し、大梅山に、只管打坐する処に、護聖寺という大伽藍が完成し、衆徒六・七〇〇人として、伝えられている。

私共の修行は、道元禅師のお示しの

「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をな

らふといふは、自己をわするなり。自己をわする、といふは、万法に証せらるゝなり。万法に証せらるゝといふは、自己の身心および他己の身心をして、脱落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長々出ならしむ。」とあります。

このコロナ感染症のまん延する無常の世の中を「発心、修行、菩提、涅槃」と、仏祖単伝の行事道環の道理に随って、心を新たにしてい

精進、行道したいと念じている次第です。 合掌
来年は先師一光方丈様の二十七回忌の年回法事に相

当いたします。
東堂老師は瑞應寺所蔵の法宝の散逸を防ぎ、保持・展観を図る、宝物館『白眉殿』を発願されました。浄行の御協賛を賜わりたく、御願

い申し上げます。 再拝

テレホン法話 (〇八九七四一・〇〇三三)

禪のたより



◆ 内証

～自己を見極める

今日は、仏教用語のお話

しの2回目「内緒」です。「内緒の話」という童謡がありますが覚えておいででしょうか？そうです「ないしょ、ないしょ、内緒の話はあのねのねう」という、あの歌です。この歌に代表されるように、一般的に「内緒」と言えば、「これは誰にも言っちゃ駄目だからね」という意味で使われます。

でも、元々この言葉は仏教用語で、内外の内に、証明書の証と書いて「内証」が本来の言葉なのだそうです。さらにこの「内証」は、元々の言葉である「自内証」を略したものだとのことです。どういう意味かというと、自分で正しいことを悟る・明

らかにすること。：私たちが普段使っている内緒とは大分違っていますね。

実は、昨年の十月のこと。遠方に住む次男から健康の為に、自転車を送られて来ました。スポーツタイプのなかなか格好いいスタイルが気に入って、暇を見つけてはその自転車に乗るようになり、「今日は、何キロ走った」とか「カロリーをこんなに消費したぞ」と、一人で悦に入っていたのです。新しい自転車にも慣れて、どんどん距離を伸ばして100キロ走に挑戦し始めたある日のこと。それはフットした、一瞬の心の隙間の出来事でした。

歩くより遅いくらいのスピードでUターンをしようとして、足を路面に伸ばしたときにその事件が起きたのでした。長距離を走って疲れていたのでしょうね、足を伸ばしたつもりが伸ばし切れず、砂利道で無様にドターン！と転んでしまったのです。数日前に購入したばかりの新品のヘルメットは勿論のこと、顔も、砂利道にズリズリと…。幸いなことに顔の傷は軽かったのですが、お気に入りのヘルメットが傷だらけになってしまったのがとてもショックでした。

この転倒事件、さすがに自転車を買ってくれた息子に隠し立て出来ず、「あんな報告したのです。すると、息子がこう言ってくれました。「ほかに怪我したところは無かったのか？」と心配してくれたり、「ヘルメットを被っていて、良かったじゃない」と。

そこで気が付いたのです。「ないしょ」とは、自転車で転んだことを隠そうとするのが「内緒」ではなく、体幹を鍛えるトレーニングを怠っていたのがそもその原因で

あると見極めるのが「内証」であつたと。その見極め、内証を明日へと繋ぐことが、気遣ってくれた息子の心を生かすことになるのかなあ?!と自戒した次第です。

鼻舌身の五根であり、五根から情報が入ると、意識が働き始めます。私事で考えますと、良い、悪い、どちらでもない、という三つのグループに大別するようで、悪いグループに入れた対象については嫌悪感が生じ、それがエスカレートすれば攻撃という事態となります。攻撃というと余程の事ですが、ネット社会では、匿名で他者を攻撃出来るため、誹謗中傷が発生しやすい社会となつてしまいました。

高知県 浄貞寺 伊藤正賢 師
令和三年四月二十一日～三十日

◆ コロナ禍で

「マスクはいつまでやるの？」
麻生太郎副総理ならずとも、愚痴をこぼしたくなるマスク生活継続中です。

コロナ禍に於いて、心に留め置きたい教えが、お釈迦さまの遺言のお経にありました。

突発的な災難の苦しみが一世に留まるとしても、人災による禍は累世に及ぶと仰っています。

人災の基となるのが、眼耳

昨年、プロレスラーの木村花さんが亡くなりました。テレビで彼女の振る舞いを観た視聴者の一部が、彼女を悪者と決めつけ、ネット上で誹謗中傷し、彼女は生きていられなくなつてしまった。五根が人災を引き起こしてしまった事件です。

般若心経では、五根は、絶対的普遍的では無いと説くのですが、意識を大勢で共有して作られた常識を過信し、常識外れを叩くという愚行は、コロナ禍のこの一年間でも多く発生しました。

それらを受けた人の心の傷は、コロナ後も残るでしょう。真に恐るべきは、コロナよりも、人の心と言えます。言動を慎み、心静かにコロナ禍が過ぎ去るのを待ちたいと思います。

瑞應寺専門僧堂

侍者 阿部 信宏

令和三年五月一日～十日

老婆心

風薫る五月。コロナ禍とはいえ、みずみずしい新緑を目にすると心が洗われるような気がする今日この頃です。

そんな心地よい季節のはずの五月ではありますが、「五月病」という言葉を耳にしたことはないでしょうか？ 新入学生や新入社員となった青年たちが、ゴールデンウィークでお休みが続くと、それまでの一か月間、緊張して張り詰めていた心の糸がプツリとキレて、休

み明けに、学校や会社に行きたくないとか、なんとなく体調が優れないといった状態になることを称して「五月病」というのだそうです。

端から見ている分には、一所懸命に受験勉強をしたり就職活動をしたりして、せっかく入った学校や会社じゃないか。何があつたか分からないが、もう少し頑張ってみないかい？ と老婆心ながら言つてやりたくなつたりも致しますね。

そこで、今回はこの「老婆心」という言葉を紐解いていこうと思います。

今時は、この言葉自体、使う人が居なくなつたのではないかと思えるほど死語に近いかも知れませぬ。皆さんなら、この老婆心という言葉をもつて務めよと仰るのです。

曹洞宗の宗祖道元禅師さまに、修行僧の食事を作るにあたっての、修行僧の心得を書き記した『典座教訓』と言う書物があります。その書物の中で道元禅師さま

は、老婆心とは「父母の心」と示されているのです。

さて、ではどのような心が「父母の心」なのでしょう？ この書物の中にその心が書かれていました。「自らの寒さを顧みず、自らの暑さを顧みず、子を蔭い子を覆う」と。なるほどそうですね、子供のこととなれば自分のことはさておいて、まずは、子供を飢えや暑さ寒さからかばい、守る。それが親の愛情、親心というものですね。そこで道元禅師さまは、食事を作るに当たっては、食物を取り扱うことひとつ、水を取り扱うことひとつ、親が子を育てる時と同じように慈しみ深く真心をもつて務めよと仰るのです。

そしてさらに道元禅師さまは、こうも示して下さいます。「二途に他のものこのことを思い、努力することを『老心』『老婆心』という」と。

甘やかすでもなく、厳しくするでもなく、一途に他のもののことを思いやる行

いが老婆心だと仰るのです。老婆心をもつて、新入学生や新入社員に接すれば、五月病で苦しむ人も減るに違

ありません。

高知県浄貞寺 伊藤正賢 師
令和三年五月十一日～二十日



僧堂内朝課

